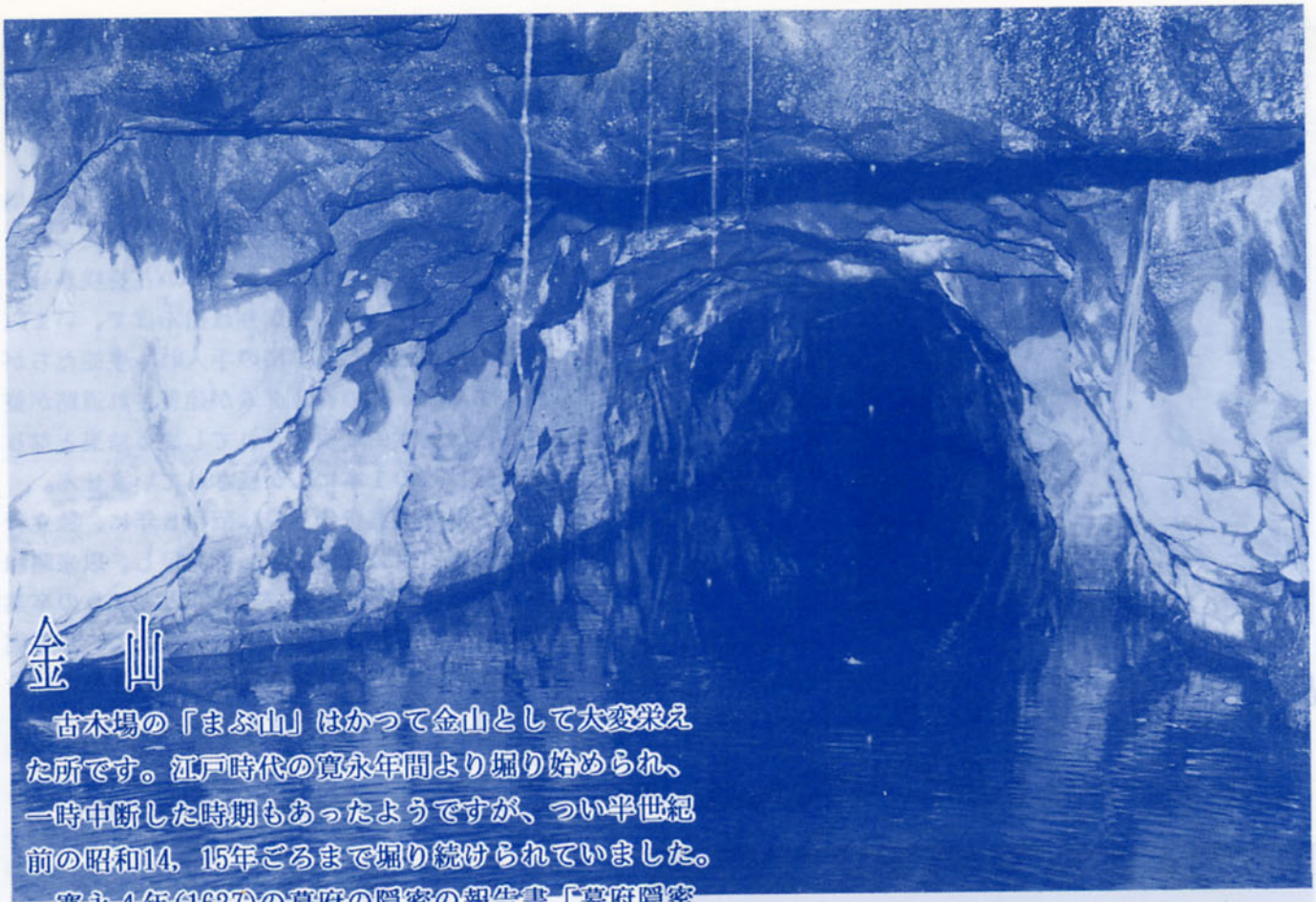


金　山

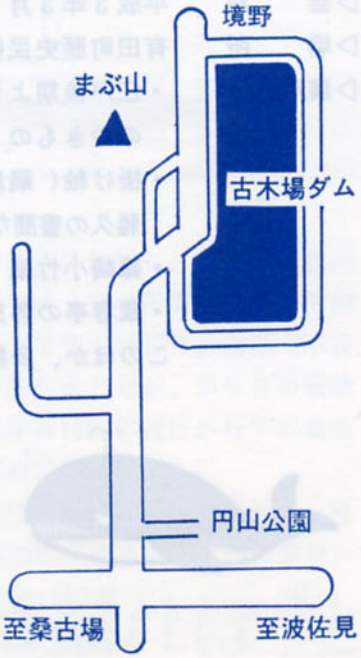
古木場の「まぶ山」はかつて金山として大変栄えた所です。江戸時代の寛永年間より堀り始められ、一時中断した時期もあったようですが、つい半世紀前の昭和14，15年ごろまで堀り続けられていました。

寛永４年(1627)の幕府の隠密の報告書「幕府隠密復命書」には、有田金山のことが書かれています。それには、寛永２年(1625)から採掘が始められ、翌年には金鉱を堀りあてたこと、「まぶ」の数は60ほどあるが実際に金鉱石を堀りあてたのは２つほどであることなどが記されています。「最も盛んだったのは採掘が始まってからの５年ほどだった」と、近くに住むおばあさんは語ってくれました。

閉山になる寸前の昭和の初めころも、九州内はもとより、遠くは関西の方からも金の採掘に人が集まったといいます。当時、古木場には金の精錬所があり、金山労働者の住まいだった長屋が並んでいたそうですが、閉山後取り壊されました。

山中にぽっかりあいた「まぶ」と、かつて金の持ち出しなどを取り締まる口屋番所のおかれていた付近が「近戸（きんど）」と呼ばれていることに、金山の名残りが見られます。　　まぶ＝坑道のこと

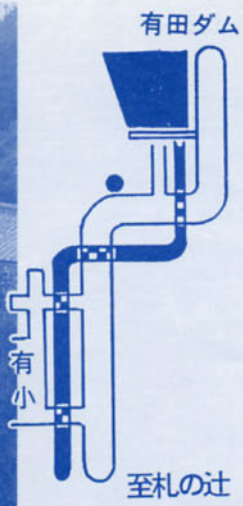
写真上＝今も残るまぶ山の坑道
写真下＝まぶ山遠景



皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報　No.13

皿山の風物



白川の桜

有田ダムの入り口へ続く道の片側に１本の桜が植えられています。これは今から50年ほど前の昭和15年、紀元 2,600年の記念事業として有田町立高等実業青年学校の生徒の手よって植えられたものです。校舎（現森病院）の入り口から評定場の町民運動場（現有田ダム）の入り口まで道の両端に植えられた 260本の桜は、毎年春になると美しい花を咲かせました。当時は道幅も狭く、周りは田んぼで、いま以上にのどかな景色でした。桜の手入れも生徒たちが自ら行いました。その後、ダムが建設され道路が整備されると、必然的に伐採されてしまう結果となり当時の面影はこの１本にしか残されていません。

有田町立高等実業青年学校は昭和６年に、独立青年訓練所充当有田公民学校として発足し、以来昭和22年新制中学校にかわるまで 1,000人あまりの卒業生を送りだしました。普通の授業に加えて、窯業実習を行っていたこの学校の卒業生は、焼き物会社を中心に就職し有田の生業を支えてきました。

企画展『蔵春亭―有田の進取精神―』

蔵春亭の歴史は、天保12年(1841)有田・中ノ原の久富与次兵衛昌保が、オランダ貿易を開始したことに始まります。以来蔵春亭は有田の窯業の歴史の中で、常にその礎を築いてきました。時代を多角的にとらえ、他に先んじて事業をなしてきた蔵春亭の進取精神には、時を越えた今でも学ぶべきものがたくさんあります。

今回の企画展は、中ノ原の久富桃太郎氏のご協力により、当家に伝わる数々の資料を展示しています。それらを通して、蔵春亭の果たした役割を伝えたいと思っています。

どうぞ多数の皆様の、ご来館をお待ちしています。

▷会　　期　平成３年３月１日(金)～３月24日(日)
▷場　　所　有田町歴史民俗資料館
▷展示資料
・江戸後期より明治・大正ころの蔵春亭のやきもの
・掛け軸（鍋島閑叟消息、孝明天皇侍従雅久の書簡など）
・篠崎小竹筆「蔵春亭」額
・蔵春亭の各氏の縁のもの
このほか、多数展示しています。

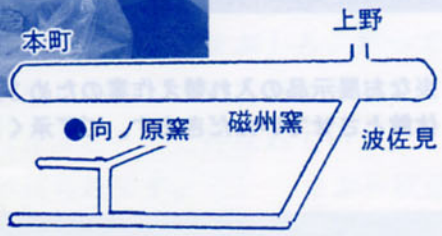
向ノ原窯跡（東より）
焼成室（８室）、写真中央に遺物が残る

町内４ヵ所を発掘調査

秋から冬にかけて町内４か所の古窯跡の発掘を行いました。操業年代の古い順に向ノ原窯（戸杓）、天神山窯（稗古場）、ムクロ谷窯（上南山）、そして黒牟田新窯の４か所です。17世紀前半の窯から19世紀以降の窯まで、その年代は様々です。まだ、発掘資料を整理中の段階ですが、現時点で解っていることを紹介します。今回は向ノ原窯と天神山窯の２つの窯を紹介し、ムクロ谷窯と黒牟田新窯については次号に載せたいと思います。

1. 向ノ原窯（戸杓）

向ノ原窯跡
物原から出土した陶磁器破片



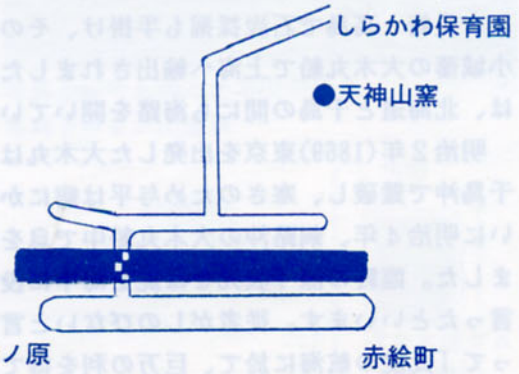
戸杓には古窯跡がほかに２か所あり、それらについては昨年調査を行い、1630年代から1640年代にかけての窯であることがわかっています。今回の向ノ原窯の調査で、戸杓の窯場の全容を把握する予定でしたが、新たな事実が新たな課題を招く結果となりました。というのは、今回の調査で少なくとも３基以上の窯が操業していたことがわかったのです。そのうち１基は存在を確認しただけで全く手をつけることができず、３基の窯の関係を正確に把握するには至りませんでした。

有田の磁器草創期の製品が陶器と共に出土

今回の調査の最も大きな収穫は、有田の磁器草創期の製品が陶器と共に出土したことです。近年の研究成果により、有田における磁器の始まりは、西部地区を中心とした窯場（天神森窯、小物成窯など）の、陶器と磁器の併焼であることが明らかにされています。今回の調査で、磁器草創期の窯のリストにまた一つ新たな窯の名前を加えることができました。

有田焼史上の一大事件の一つに、寛永14年（1637）の窯場統制があります。これを機に有田は磁器専業の体制を固め、今に至っています。この事件の際に陶器を焼いた窯はほとんどつぶされました。向ノ原窯では明らかに寛永14年以降の製品が焼かれています。このように、磁器草創期において陶器を焼いた窯で事件を免れた窯場はほかに黒牟田の山辺田窯があるのみです。

2. 天神山窯（稗古場）



この窯は稗古場窯跡の北東に位置し、天満宮の裏山にあります。今回の調査では、窯の正確な位置、方向を明らかにすることはできませんでした。物原（不良品の捨て場）の一部を確認しましたが、かなりの破壊を受けており、1630年代から1650年代にかけての物原層が残っていただけでした。

操業期間は、物原およびそれ以外の出土遺物から推測して、1630年代から1670年代であると思われます。

久富子藻の碑は稗古場・報恩寺境内に祀られています。観音山を背景にして建つこの碑は長鯨碑とも呼ばれ、その名が示すように鯨の形をした花崗岩の上に、碑文の刻まれたみかげ石をのせています。

久富子藻＝久富与平は、天保３年(1832)に久富与次兵衛昌常の六男として有田・中ノ原に生まれました。長兄昌保は天保12年(1841)にオランダ貿易を始め、佐賀本藩十代藩主鍋島閑叟から『蔵春亭』の屋号を受けています。

与平は常に洋銃を肩に部下を一人連れて、西の嶽（西有田）に入り狩猟を楽しんだといいます。後に長兄昌保の養子となり、長崎・大村の『蔵春亭』の支店経営にあたります。また、英国人グラバーと共に、長崎・高島で石炭採掘も手掛け、その石炭は、小城藩の大木丸船で上海へ輸出されました。後年には、北海道と千島の間にも海路を開いています。

明治２年(1869)東京を出発した大木丸は、翌３年千島沖で難破し、寒さのため与平は病にかかり、ついに明治４年、釧路沖の大木丸船中で息を引き取りました。臨終の際「我死せば屍を海中に投ぜよ」と言ったといいます。従者がしのびないと言うと、笑って「此度の航海に於て、巨万の利を得て五大洲を廻らんと思ひしに、不幸時を得ず病に罹る、天命也。死後、長鯨に跨がって、初志を遂げん」と答えたといいます。常に外に目をむけ、人に先駆けてものごとを行ってきた、非凡な与平を象徴する言葉です。

この碑は、志成らずわずか40歳という若さで逝った与平を悼み、甥の久富季九郎・二六父子によって、建てられました。題字は鍋島直庸、碑文は谷口藍田によるものです。

街角の歴史

お知らせ

古文書教室

自宅の古文書を読んでみませんか？

平成３年度４月から古文書教室が新たにスタートします。今回は初級、中級の２クラスを用意しました。昼間都合のつかなかった皆さん、チャンスです。行ってみたかったけれどどうも……不安だったという方、大丈夫です。初歩の初歩、文字のくずし方から教えてもらえます。

ぜひこの機会に、一緒に歴史に遊びましょう。

- 講　　師　　前山　　博　先生
  （佐賀県立九州陶磁文化館　副館長）
- 開催日時　　毎月第２水曜日
  13時～15時（中級）
  19時～21時（初級）
- 場　　所　　生涯学習センター　集会室
- 使用テキスト　『皿山雀』　（中級）
  『御手頭写』　（初級）

拓本・裏打ち教室

普段、何気なく見過ごしている石造物。しかし気をとめて見ると意外な文字が刻まれていたり、不思議な模様が浮き彫りにされていたり、思いがけない発見があるものです。これらの歴史資料を墨で写しとってみませんか。

- 講　　師　　盛　峰雄　先生
  （伊万里市教育委員会　文化財担当）
- 日　　時　　３月９日・23日（第２・第４土曜日）13時～15時
- 場　　所　　有田町歴史民俗資料館

拓本・裏打ち教室、古文書教室の参加希望の方は、有田町歴史民俗資料館までお申し込みください。

※なお展示品の入れ替え作業のため３月25・26日は、休館とさせていただきます。ご了承ください。

有田町歴史民俗資料館報　No.13

発行年月日 ＊ 平成３年３月１日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955－43－2678